入選

未来へ繋ぐ水源

鳴門教育大学附属中学校　二年　柳本　紗那

「いただきます。」

私は、祖父母の作るお米が大好きだ。我が家の米作りは、少し変わっている。

私の住んでいる吉野川市は、日本三大暴れ川として有名な吉野川が、県を東西に流れている。この川のおかげで、徳島県では水不足に陥ることが、あまりない。だが、私の住んでいる所は、山の麓であり、米作りの際、水を引く川がない。そのため、我が家の米作りの水源は、家のすぐ横にある小さな皿池を利用する。皿池とは、窪んだ土地の周りに堤防を作って築いた、小さなため池のことだ。

毎年、稲が丈夫に育つまでの約四ヶ月間、皿池の水を常にはって水田に水を送り続けなければならない。祖父はその期間、毎日皿池の様子を確認し、水田の水位を調節し、管理してくれている。私は、田植えを終えたばかりの小さな稲苗が、朝日に包まれ、きらきらとした水田の中でしっかりと根を張って踏ん張っている、その光景が大好きだ。なんだか私も頑張ろうと背筋がピンとする。そして、水は、稲が立派に育つよう見守り、しっかり支えている。稲にとって水は母のような存在なのだろう。秋になると、たくさんの水を吸って大きくなった稲を家族総出で収穫する。我が家は、昔ながらの方法で、稲を刈って束ね、それを逆さにし、一週間程度干すのだ。そうすることによって、茎の養分が米に行き渡り、太陽に干すことによってアミノ酸が増え、旨味が増すそうだ。この手間暇かけた我が家のお米を近所の甘く美味しい湧水で炊くと、最高の逸品となる。

しかし、数年前の梅雨時、雨がほとんど降らず、皿池の水位が低下し、干ばつ被害に直面した。そのとき、家族総出で何往復もしながら川の水を大きなタンクで運んだのを覚えている。これは、祖父も経験したことがないと言っていた。私の母が小さいとき、この皿池の水位は今よりはるかに増していたそうだ。この皿池は、カブトエビやヤゴ、渡り鳥が飛んでくる。ついこの間、皿池で沢蟹を見つけた。沢蟹を見つけたのは、初めてだった。たくさんの生物が生息しているという事は、生物たちにとっても、良い環境なのだろう。皿池は、たくさんの生物たちにとって、生きるための大切な住処なのだ。

私は、今まで梅雨に降る雨が好きではなかった。気温が高く、雨が降ることで湿度も上がり、とても生活しづらい。おまけに、雨が降ることで通学にも影響がでる。だが、この雨こそが、米作りに必要不可欠な水源となることを知り、考えが１８０度変化した。この雨が山に降り、やがて川や皿池に集まり、私たちの生活に直結する。そして、私たちはこの雨によって、この水によって、今生きているのだ。この美味しいと言って飲んでいる水、美味しいと言って食べているお米や野菜、それはいつまでもあり続けるものではない。

近年、地球温暖化が進み、気候変動が増加している。降水量が多くても少なくても、気温が高くても低くてもいけない。ちょうどいいころ合いが必要だ。私たちはこの資源を守り続ける義務がある。水は、私たちにとって一番身近なものであり、だからこそ、その大切さや危機に気づきにくい。

私は、この我が家の米作りを受け継いでいくために、皿池を、そして水を守っていかなければいけない。この冬、祖父は少しでも皿池に水が溜まるよう、重機で掘って整備した。私も美味しい米が滞りなく作れるように、そして生息する生物たちが安心して暮らせるようにと願い、皿池に落ち込んでいた、竹林や木を撤去するのを手伝った。これからも私にできることを探し続けたい。

あなたも身近なものを通じて、水を守るためにできることは何か考えてみてほしい。これはどうなっているのだろうと思ったとき、それがあなたの新たな始まりなのだ。